

下北沢の空地活用について

Keywords

下北沢 空地 都市計画道路
工房 仮設建築 コンテナハウス

DZ21161 松井 立十



1. はじめに

私は幼少期から現在に至るまでを世田谷区の「下北沢」で過ごしてきた。そのため、線路が地下化する以前の街の様子はもちろん、最近の都市開発の変容に関しても身をもって体験している。

そのような長年自身が世話になった「下北沢」という地域について、今回改めて見つめなおすことにした。そして、現状の課題を分析し、それに対する改善策を展開したいと考える。また、それだけでなく、地域住民全体にフレキシブルな意識を持たせ、循環を主とした新しい地域性を取り入れたいと考える。

2. 下北沢について

2.1 地域概要

下北沢は、東京都世田谷区の北東部に位置する下北沢駅周辺の通称である。サブカルチャーをはじめとした「若者の街」として人気の繁華街である。

「若者の街」というイメージが定着しつつある「下北沢」だが、明治末までは下北沢村という農村だった。

大正時代に入ってから、東急玉川線の開通と関東大震災による都心からの移住者は増加した。そして、1927年に小田急電鉄 小田原線が、1933年に京王電鉄井の頭線が開業すると、急速に商業地へと成長した。その後は戦後の影響も強く「闇市」の名残を街に残していた。

昭和後期に入った1970年代半ばから本格的に「若者の街」として賑わいを見せ始める。ロックやジャズ、ブルースを流すバーが数多く増えた。1979年に「下北沢音楽祭」を開催したことをきっかけに「若者の街」のイメージが浸透していった。1982年に「本多劇場」がオープンしてからは「演劇の街」としても注目されていった。

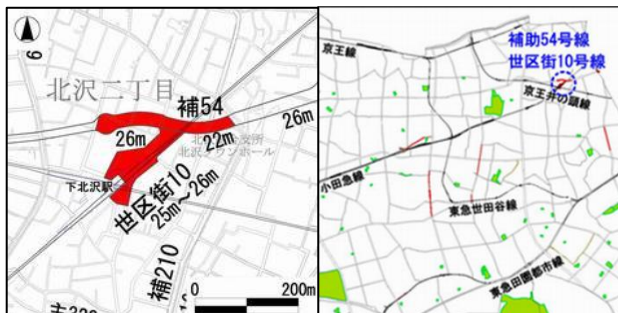


写真1 都市計画道路予定地

2.2 都市計画道路

下北沢駅東口では現在、都市計画道路が整備されている。これによって、茶沢通りから下北沢駅の改札前まで、自動車やバスが乗りつけることが可能となる。これは「歩行者の街」である下北沢にとって「革命的」なことであると考えられる。

駅まで車で送り迎えをしたりタクシーに乗ったりといった他の駅では見られる光景は、下北沢駅には存在しなかった。それが下北沢駅を独特の街たらしめていた面でもあるが、そんな「歩行者の街」であった駅前周辺部の様相がこの計画によって変化を遂げようとしている。

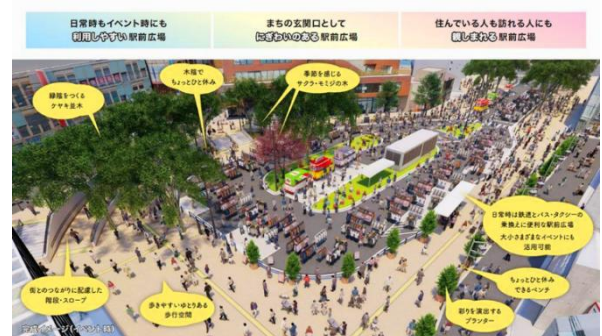


写真2 下北沢駅前広場完成図

3. 地域分析

下北沢には大きく分けて2つの特徴があると考えられる。それは、自由度の高さと変化の多様さである。前者は、多彩な店舗や訪問者といった同じもの同士を除く一切の共通点が存在せず、ただ下北沢に存在するという点のみが唯一のつながりとなっている。流行最先端の店舗から老舗店舗、若者から高齢者まで、行われるイベントの数々といった様々なジャンルで幅広く街を賑わせていると考えている。後者は、常に変化し続けているものだけでなく、変化していないものもある。

つまり、下北沢とは恒久的、痕跡的、新生的な特徴があるまちと地域性に過剰に縛られすぎていない概念が合わさってできていると考える

地元民としての視点からの課題もある。それは、空地の未活用である。基本的に休日などに何かしらのイベントを行っていることが多い。週末や祝日といった休日にそのイベント目当てで下北沢を訪れる観光客からすれば

常にイベントを行っていてにぎやかに感じる。しかし、地元民からすると普段は閉鎖されているせいで全く利用できず、イベント時の限定的な利用のみで終わってしまっているその土地がもったいないと感じていると個人的に考える。

4. 研究概要

今回の研究において上記の課題を解決するために空地を活用した服工房の設計を考えた。再開発によって発生した空地の存在が「下北沢」という街の特徴の一つである雑多な雰囲気を崩している。また、現在の下北沢の多くを占めている古着屋だが、ファストファッションの消費のみで終わっていることが極めて残念である。そこに工房を配置することで、新たに「修復」という要素を街に加えることができ、循環可能な社会になると考える。

敷地の選定では、前期に調査した主要な空地の中からCを選択した。これは数ある空地の中で最も人の流れが密な地点だからである。また、周辺の設備施設に古着を取り扱っている店舗が多く存在するからである。これらにより、服に関係する設備を設計をした際の影響が最も大きく、広がりやすいと考えた。

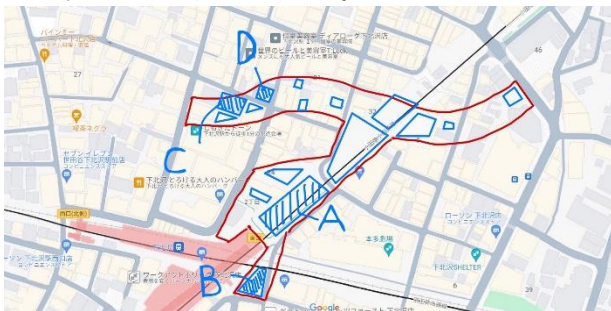


写真3 下北沢の主要な空地位置

・空地C



写真8 北

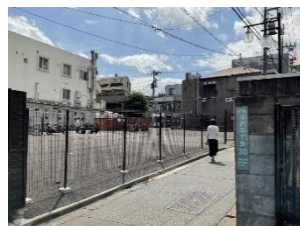


写真9 東

敷地面積は約250m²であり、商業地域に位置した土地である。この敷地に対し、空地活用による地域活性化とイベントコミュニティの場の形成を狙う。

5. プログラム

本建築設計のプログラムでは、再開発により生じた空地を活用し、地域住民と観光客が共に楽しみ、持続可能な社会を推進する施設を設計することを目的とする。特に、修復や再利用をテーマとした「服工房」を中心に、下北沢の特徴的な文化である古着の活用を促進する。

下北沢の多様性を反映した施設として、ファッションやアートの発信へとつながることも意識したい。これによって各古着屋はもちろん、クリエイターとの連携も強化していきたいと考える。

空間構成では、服の修復を目的とした工房、イベント時の利用を想定したスペース、運営を行う事務スペース、住民・観光者の交流を目的としたコミュニティスペースが主な構成となっている。

6. 設計手法

設計手法では、下北沢の空地を活用するにあたり、建設の柔軟性と環境負荷軽減を両立する手法としてコンテナハウスを採用することにした。またそれだけではなく、この手法はコンテナ本来の粗野で無骨なデザインが下北沢の「雑多さ」や「自由な雰囲気」と調和しつつ、アートやサブカルチャーとの親和性が高いと考えている。

コンテナハウスの最大の特徴は、モジュール式であることにより、用途に応じた柔軟な空間設計が可能である点である。これにより、空地の特性に合わせた多層的な空間の構築を計画している。通りからのアクセス性が高い1階部分には、服工房やイベントスペースを配置する。また、2階部分には訪れる人々が気軽に集えるような修復された服の展示やコミュニティスペースを配置する。

コンテナハウスを基盤とした設計手法は、空地活用を通じて下北沢の新たな可能性を開き、地域の持つ価値をさらに強調するものとなると考える。そして、この取り組みをプロトタイプとして試験的に実施することで、新しい事業の構想へと繋がり、他の空地へと展開されることを願っている。そして、街の個性を守りながらも持続可能な社会への道を切り拓く手段となることを期待している。

7. 参考文献

- ・都市計画道路補助第54号線（下北沢1期）及び下北沢駅駅前広場（世田谷区画街路第10号線） | 世田谷区ホームページ
<https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/sumai/009/001/002/d00014356.html>

下北沢の空地について

dz21161 松井立十

概要

再開発により生じた空地を活用し、住民と観光客が共に楽しみ、持続可能な社会の推進を目指す。特に、修復や再利用をテーマとした「服工房」を中心に、下北沢の目玉文化である古着の活用を促進する。また、ファッションやアートの発信へのつながりも意識したい。

空間構成では、服の修復を目的とした工房、イベント時の利用の際のスペース、運営を行う事務スペース、交流を目的としたコミュニティスペースが主な構成となっている。

人の流れを通す配置計画

